

# 老巡查

夢野久作

青空文庫



睦田老巡查はフト立ち止まつて足あしもと下を見た。黄色い角燈かくとうの光りの輪の中に、何やらキラリと黄金色きんいろに光るものが落ちていたからであつた。

老巡查は角燈を地べたに置いた。外套がいとうの頭巾ずきんを外して、シンカンと静まり返っている別荘地帯の真夜中の気はいに耳を澄ました。だが、やがて手袋のまま外套の内ポケットを探つて、覚束おぼつかない手付きで老眼鏡をかけながら、よく見ると、それは金きんぐち口の巻まきた煙草こいばせの吸いさしを、短かい銅線の切端きりはしの折れ曲りに挟んで、根元まで吸い上げた残りであつた。そこいらにすこしばかり灰が散らばっていると見ると、ツイ今しがた投げ棄てたものら

しかつたが、しかし火は完全に消えていた。おおかた冷たい大地の湿気を吸つたものであろう。

睦田巡査は、いくらか失望したらしく、力ない手付きで眼鏡を外した。そうして、

「心配なことはない」

と口の中でつぶやきながらモウ一度そこいらの暗闇を見まわしたが、なお念のためにその吸殻すいがらを泥靴でゴシゴシと踏みにじつて、火の気がないことを確かめてから、老眼鏡をモト通りに、外套の頭巾を頭の上に引上げると、又も角燈を取り上げながらポツリポツリと歩き出した。……すこし睡ねむくなりながら……。

彼は、こうして幾カラットのダイヤモンドにも優まさるスバラシイ

幸運を踏みにしつて行つたのであつた。金口の煙草を、そんな風にして吸う人間がドンナ種類の人間であるか考えたならば……：……：……  
 うしてソナ種類の人間が、このような真夜中の別荘地帯に無暗<sup>むやみ</sup>  
 に来るものか来ないものかを、その時にチヨツト考えてみただけ  
 でも、彼の一生涯の幸運を取返す筈であつたのに……。

もう五十を越していながら、まだ部長にもなり得ないでいる睦  
 田巡査は、こうして巡廻を続けながら、これぞという功績も過失  
 もなかつた平々凡々の彼の巡査生涯を、何度くり返して考え直し  
 たか、わからないのであつた。何か事件が起るたんびに、こんな  
 仕事は自分に向かないと思つてビクビクしながらも、ただ病身の  
 妻と、大勢の子供が可愛**い**ばかりに、思い切つて辞職もし得な

いで来た彼の運命のみじめさを幾度涙ぐんだか知れないのであつた。

だから最近に榮転した前署長のお情けで、東京郊外の平和な別荘地になつてゐる、このK村の駐在所に廻わされると、受持区域に住んでゐる知名の人々からの附届けで、やつと息が吐けるようになった事をドレ位、感謝してゐたことか。その巡廻の一足一足毎に……この地域に事なかれかし……とドンナに誠意を籠めて祈つたことか。そうして又、それが泥棒一つ捕まえた経験のない無能な彼の、心中からの……ただ一筋の悲しい願いでなければならぬ事を、彼自身に何度、自覚したことか。

しかし睦田巡査はまだ二十歩と行かないうちに、タツタ今踏み

付けた奇妙な吸殻の事をキレイに忘れてしまっていた。まん丸い背中を一層丸くして、外套の頭巾を深々と引下して、薄暗い角燈の光りの中に、どこまでもどこまでも続くコンクリート壁や、煉瓦塀や、生垣の間をトボトボと歩いて行った。

寒い寒い星の夜であつた。

その翌<sup>あく</sup>る朝であつた。

彼が踏み躪<sup>にじ</sup>って行った幸運が、ソレだけの悪運となつて彼の頭上に落ちかかつて来たのは……。

彼の受持区域内でも、屈指の富豪と眼指<sup>めざ</sup>されている倉川男爵家の別邸に二人組の強盗が入つて、若い、美しい夫人と小間使を絞

殺し、一人の書生に重傷を負わせ、夫人所有の貴金属、宝石類と、現金二百余円を奪い取つて逃走した事が、夜明けまで震えていた台所女中によつて、分署まで報告された。そうしてその兇行の推定時刻が、彼の巡廻時刻とピッタリ一致したのであつた。

電話で「巡廻中異状はなかつたか」と尋ねられた時に、何の気もなく「ハイ」と答えた彼は、すぐにK駐在所から一里ばかりを距へだたつたK分署に呼び付けられて、居残つていた法学士の分署長から、眼の玉の飛び出るほど叱責されなければならなかつた。そうして、

「見舞に行くには及ばぬ。君のような人間が現げんじよう場に立会つたとて役に立つものじゃない。留守をして電話でも聞いていたまえ」



と小使の面前で罵倒されたのであった。

署長以下の全員が出動したあとで、ガラソとした室の真中の大火鉢に椅子を寄せて屈かがまり込んだ睦田巡査は、その青ざめた顔に幾度も幾度も涙を流した。そうして電話がかかるたんびに水みずっぱをススリ上げススリ上げ立上っていたが、その電話を本署に取次いでいるうちに……遭難した倉川家の若い男爵は、旧友の某国大使を神戸に出迎えに行つた留守中であつたこと……犯人はドチラも黒装束に覆面をした専門の強盗らしかつたこと……倉川家の裏手のコンクリート塀を乗越える時に、電話線を切断してしたこと……バンガロー風の二階の窓硝子ガラスを切つて螺旋止めねじを外して忍び入つたこと……夫人と小間使は眠つたままの位置で絞殺され

ていたこと……重傷を負わされた書生が間もなく死亡したこと……  
：物置に隠れて震えていた台所女中が、夜の明けるのを待つて、  
お隣りから分署に電話をかけたこと……そのほかは一切不明……  
といったような事実が判明して来た。

彼は非常召集を受けた巡査たちが、自宅から直接に現場へ行く  
姿を、真白な霜の野原と一いっしょ所に思い浮かべた。そうしてそんな  
連中が、無能な自分を怨んだり、冷笑している顔付きまで想像し  
てみた。それから事件が万一迷宮に入った場合に、当然自分に落  
ちかかって来るであろう運命に就ついて、くり返しくり返し考えて  
みたが、しかし、それはイクラ考え直しても、わかり切った事であ  
った。

睦田巡査はポケットから錠なたまめぎせる豆煙管を出して粉煙草こなたばこを一服吸い付けた。思い諦らめた投げ遣りのような気持でフーツと煙を吹くうちに、思わず噎むせかえつてゴホンゴホンと咳せきをしたが、それにしてもこの際くれぐれ呉々うぐわも残念なことは、自分の受持区域でありながら、被害者の家に見舞うちに行けない事であつた。

いつも彼の老体に同情して、色々と問い慰めた上に「主人が留守勝ですから、どうぞよろしく」と云つて十分の心付をしてくれた、あの美しい奥さんの霊前に、誰よりも先に駈け付けて、心からのお詫びの黙禱が捧げたかつた。そうして出来ることならば新しい手がかりの一つか半分でもいい、心安い台所女中の口からなりと引き出して署長の機嫌を取直したい……当座の不面目を取とりつく

繕ろいたいと、暫くの間そればかりを気にして考え直していたが、しかし、それとても今となつては力及ばない事であつた。

彼はこうして誰を怨む力もなくなつた彼自身の姿を、灰になりかけた火鉢の縁に発見したのであつた。そうして彼の眼の底に蠢うごめくものは結局、瘠せ衰えた彼の妻と、その周囲まわりを飛びまわつたり匍はいまわつたりしている子供たちの姿ばかりになつてしまつた。

彼はそうした幻影を見まいとしてシツカリと眼を閉じた。すると最前から溜まつていた生なまぬる温なみだい泪がポタポタと火鉢の灰の中に落ちた。その一粒が消えかかつた炭火の上に落ちたらしくチューチューと音を立てたが、その音を聞いているうちに又も新しい涙わきだが湧出して来るのを、彼はドウする事も出来なかつた。

そんな事を考えまわしているうちにいつの間にか時間が経つたらしい。彼の背後の柱時計が夢のように一時を打つと間もなく、非常線に出ていた同僚の二三名がバタバタと帰って来た。

「……ああ……ねむいねむい……」

「いくら云うたて新米の署長は駄目じゃよ。第一非常線からして手遅れじゃないか。青年会なぞ出したって何の足しになるものか」

「まあそう云うなよ。お蔭で無駄骨折が助かるじゃないか」

「指紋もないそうですね」

「ウン、今頃は犯人等、千里向うで昼寝してケツカルじやろ。ハハ。うまくやりおった」

そう云ううちに古参の彼が居ることに気が付くと、慌てて敬礼

をしいしい帯剣を外したが、そのまま各自めいめいの椅子に就いてヒツソリと口を噤つぶんでしまった。彼等は睦田巡査が最前署長から叱られた事を知っているらしかった。

睦田巡査は、もう現場の模様を聞いて見る勇氣さえ出なかつた。ただ、無能の標本みたように、火鉢のふちに曝さらし物にされている自分自身を顧みて、力なくうなだれるばかりであつた。

それから、ちようど満一年経つた。

睦田巡査は予想通り年度代りで首になつたが、それでも貰えるものだけは貰つたので、それをたよりに色々と縁故を辿たどつて運動した結果、二個月ばかり前から市外の製作工場の門衛に雇われて

いた。むろん俸給は安いし、夜勤もあるにはあったが、しかし殆んど門番と受付を兼ねたような単純な仕事であった上に、巡廻の区域が非常に狭かったので、肥満した睦田老人にとっては、却つて極楽のような気がしたのであった。

彼は毎日正午の休憩時間になると、会社の事務室に来て、新聞の続きものを読むのが、何よりの楽しみになった。ビクビクと縮こまったまんま、何の華やかさもない生涯を送つて来た彼は、その小説や講談の中に出て来る気の毒な、憐れな運命の持主に満腔まんこの同情を寄せると同時に、そんな人々が正義の力によつて救われて行く筋道を、自分の事のように力ちからこぶ瘤おとを入れて読み続けた。ことに世の中のしたづみ下積おとなになつた溫柔おとなしい人間が、思いがけな

い幸運に出会つたり、お上かみから御褒美ほうびを戴いたりする場面にぶつかると彼は、人に気付かれるのを恐れるかのように、ソツと眼鏡を拭いながら、二度も三度もくり返して読み直しては、人知れず溜息をするのであつた。

ところが、そのうちにツイ二三日前のこと、フト眼に付いた社おおみだし会面の大標題を、何心なく見直してみると、彼は思わずドキンとして、老眼鏡をかけ直した。

就職運動に逐おわれているうちに、忘れるともなく忘れていたけれども、モウ、とつくの昔に捕まっているものとばかり思つていた一年前のK村の強盗殺人犯が二人とも、まだ捕まっていないばかりでなく、益々兇暴を逞しくしているのであつた。



倉川家の幸福と共に、彼の運命までも蹂躪じゆうりんし去った二人組の黒装束は、若い倉川男爵が、涙のうちに大枚三千円の懸賞金をなげだ投出して、復讐を誓ったにも拘わらず、その後三回までも東京郊外を荒しまわって、警視庁の無能を思う存分に嘲笑したのであった。そのあげく暫く消息を絶っていたが、この頃になつて、ズツト飛んで京大阪地方に河岸かしを変えたらしい。やはり閑静な住宅地が専門らしく、既に二軒ふたほど、おなじ二人連ふたの黒装束に襲われていて、一軒の家うちでは、後家さんが絞殺され、もう一軒の家うちでは、留守番の男が前額を斬割られていた。

新聞は又も思い出したように当局の無能を鳴らし初めていた。そうして一年前のK村の惨劇を振出しにした彼等の戦慄すべき兇

暴な手口を、殆んど称讚せむばかりに書立てていたのであった。

睦田老人は、殆んど新聞の半面を蔽うているその長々しい大記事を読んでいるうちに、モウ、息も吐つかれなくらいタタキ付けられてしまった。……モウ沢山だ……モウ沢山だ……と叫んで逃げ出したい気持になりながらも、息も吐つかれぬ心苦しさに惹き付けられて読んでいる彼を……これでもか……これでもか……と押え付けるかのように、峻烈を極めた筆付きで、今までの事件の記録が繰返されてあつた。そうして最後に、これ等の数件の犯罪は、その手がかりの絶無なところから、逃走の神速な点に到るまで、在来の日本の警察能力をはるかに卓越し、且つこれを冷笑しているものと見るべきである。かかる残忍大胆なる犯行を防止し得な

い警察当局は、ソモソモの責任をどこに持つて行こうと思つて  
いるのか……といったような激越な論調で結んでいるのであつた。

睦田老人は病人のように青褪あおざめたまま事務室をよろめき出た。

事件後間もない或る夕方のこと、小雨の降る中を人知れず、倉川  
家の門前に行つて、心からお詫びをした時と同じ気持ちになりなが  
ら……そうして今となつては同じようなお詫びをイクラ繰返して  
も追付かなくなつた彼自身の無能な立場に気付きながら……。

睦田老人はそれ以来、事務室へ新聞を読みに行かなくなつた。

五つ六つ読みかけている続きものの後段が、たまらなく気にかか  
るにはかかったが、しかしその間に又もや挟まれているかも知れ

ない二人組の黒装束の記事のことを考えると、二の足を踏まずにはいられないのであった。

彼は今日も新聞を読みに行きたいのをジツと我慢しいしい門衛の部屋に腰をかけながら、ボンヤリと火鉢に当っていた。お天気がいいので急に殖えて来た蠅はえが二三匹、ブルブルンと這いまわっている汚れた硝子戸ガラスを見詰めていた。

門の前の空地の向うには、大きなS製薬会社のコンクリート壁が屹立きつたっていて、ルンペンが三人ほど倚よりかかっていた。そこは日当りがいいし、交番から遠くもあったので、いつも一人か二人のルンペンが居ないことはなかった。その姿を見ると彼は、いつも自分の境遇に引き較べて、儂はかない優越感を感じながら、心持ちだ

け救われたようなタメ息をするのであった。

今も睦田老人は、そうした気持で何気なく、そんなルンペン達を眺めていたのであったが、そのうちに中央まんなかの一人が妙な手付きをして煙草を吸っているのに気が付くと、睦田老人は、その青白く曇った眼を急にギョロギョロと廻転させた。慌ててポケットをかい探りながら老眼鏡をかけた。

ズツト前から、度が弱くなっていた古い鉄縁てつぶちの老眼鏡は、ちようどそこいらに焦点が合うらしく、その鬚ひげだらけのルンペンの口元がよくわかった。

そのルンペンは、よく新聞や雑誌に出て来る外国の大政治家のように荘重な眼付をした、堂々たる鬚男であったが、どこかそこ

いらの道みち傍そばから引抜いて来たらしい細い草の茎くきを折曲げた間に、短かい金口の煙草を挟んで、さも大切そうに吸っているのであつた。

睦田老人は思い出した。ちようど一年前に巡廻したあの寒い真夜中の出来事を……。自分が踏み潰した金口煙草の吸いさしの形を……。そうして死んだ倉川夫人の白い、美しい笑顔を……。

睦田老人は、思わず椅子から腰を浮かしながら、黒い詰襟つめえりのフツクをかけ直した。それは肥満した彼が、事件で出勤する度たびごと毎とにいつも繰返した昔の癖であつたが……。

門衛の部屋から出て来る制服制帽の彼を見ると、ロンペンの中の二人は追い払われるのかと思つたらしく逃げ腰になつた。しか

し真中の鬚男だけは、なおも金口煙草に気を取られているらしく片眼をつぶって、唇を横すじかいにしいしいプカプカと紫色の煙を吸い味わっていた。

睦田老人は、わざとニコニコしながらその前に近付いて行った。今朝、職工長から貰ったカメライヤの袋の中から三本を抜き出して、<sup>てのひら</sup>掌の上に載せながら……。

彼のそうした態度を見ると、三人のルンペンが急に帽子に手をかけてヒョコヒョコとお辞儀をした。

睦田老人は一世一代の名探偵になったような気持ちがあった。心安そうに三人の間に並んで壁に倚よりかかりながら、出来るだけ巡査口調を出さないようにして話しかけた。地面に投棄てられた金

口の煙草を指しながら……。

「そんな金口は、どこから拾って来るかね」

「コレケ」

と鬚男は破れたゴム靴の片足で、その煙草を踏み付けながら答えた。

「これあ盛り場から拾<sup>ひ</sup>らつて来<sup>く</sup>んだ。別荘町<sup>なげ</sup>だら長えのが落ちてるツテツケンド、俺<sup>おら</sup>、行<sup>い</sup>ったコタネエ」

鬚男は腹からのルンペンらしく、彼等特有の突ツケンドンな早口で、彼等特有の階級を無視したルンペン語を使った。巡査時代に乞食を取調べた経験を持っている睦田老人でなかったら、到底聞き分けることが不可能であつたらう。睦田老人は何となく胸の



躍るのを禁ずる事が出来なかつた。

「フーム。君たちの仲間で、わざわざ別荘地へ金口を拾いに行く者があるかね」

「居いツコタ居いツケンド、そんな奴等、テエゲ荒稼ぎダア。コツトラ温おとな柔なしいもんだ……へへへ……」

鬚男は黄色い健康な歯を剥むきだ出しながら、工場こうばの上の青空を凝視した。

睦田老人は強しいてニコニコ顔を作ろうと努力したが出来なかつた。顔面の筋肉が剛こわばつてしまつて、変な泣き顔みたようなものになつてしまつたことを意識した。

「フーン。荒稼ぎというと泥棒でもやるのかね」

「何だつてすらア。本職に雇われて見張りでもすれあ十日ぐれ極楽ダア。トツ捕まつてもブタ箱だカンナ」

「ウーム。中には本職に出世する者も居るだろうな」

「たまにや居るさ。去年まで一緒に稼いだタンシユーなんざ、品川の女郎アマツペ引かして、神戸へ飛んだつち位だ」

「……ナニ……何という……神戸へ……」

睦田老人の声が突然にシヤガレたので、三人のルンペンたちが妙な顔をして振向いた。睦田老人は慌てて顔を撫でまわしたが、その時に自分の額がジツトリと汗ばんでいるのに気が付いた。彼はわざとらしい咳払いを一つした。

「フムー。エライ出世をしたもんだな」

「ウン。野郎……元ツカラ本職だったかも知んねツテ皆、みんな左様云  
つてツケンド……いつも仕事をブツタクリやがった癖に挨拶もし  
ねえで消えちまった罰ばち当りだあ。今にキツト捕まるにきまつて  
ら」

「フーン。ヒドイ奴だな、タンシューツて奴は……」

「丹六つて奴でさ。捕まったら警察で半殺しにされるんでしよう  
……ネエ旦那……」

「……そ……そうとも限らないが、人を殺したら死刑になるだろ  
う」

「ブルブル。真平まっぴらだ。危ねえ思いするより、この方が楽だあネ

エ旦那ア……」

「そうともそうとも。しかし……その男……丹六とかいう男は人を殺したのかね」

「……………」

鬚男は返事をしなかった。ビツクリしたように眼をマン円まるく見開いて睦田老人の顔を見たが、忽ち首をキュツと縮めて、眼をシツカリと閉じて、長い舌を、ペロリと鬚の間から出した。……と  
思うと一瞬間にモトの表情に帰って眼を剥むき出しながら、

「エへへへ……」

と卑いやしい笑い方をした。

そんな表情を見たことのない睦田老人は、思わずゾーツとさせられた。しかし一生懸命に注意力を緊張さしていたおかげで、そ

の表情の意味だけは、わかり過ぎる位わかった。そうして吾知らずカーツと上気したまま、鬚男の笑い顔を穴の明く程、凝視したのであつた。

それから十分と経たないうちにタツタ一通話の市外電話を受取つた警視庁は俄然として極度の緊張振りを示した。

すぐに刑事を製作所に走らして、まだ日陽ボツコひなたをしていたルンペンの鬚男を引致いんちすると同時に、睦田老人を召喚して立会わせながら嚴重な取調べを行う一方に、別の刑事を飛ばして、品川の女郎屋をシラミ潰しひかに調べ上げると、鬚男が話した通りの人相の男が、昨年の暮に落籍ひかした女の写真が手に入った。……と……そ

の夜のうちに二人の敏腕な刑事が、鬚を剃らして変装さしたルンペンと、女の写真を護つて、大阪に急行したのであつた。

それから、ちようど二週間目の夕刊には東京、大阪とも同時に、二人組の強盜が捕まつたことを特号標題で報道した。

もつと

尤も京阪地方の新聞の大多数は、犯人の足が、意外なところから付いたように書立てていた。つまり被害者の家うちには申合あわせたようにS・S式軽油ストーブが在つたところから、もしやと思つて京阪神地方の煖房具店を調査すると果せる哉かな、東京から廻送して来た写真の女が開いている軽油ストーブ店が三の宮で発見されると同時に、その店の主人と雇やとい男おとこが犯人に相違ないことが判明したものである。しかもこれを白昼に襲撃して一挙に三人を逮

捕することが出来たのは、何といつても当局の偉功であると、極力賞讃しているのであったが、これに対して東京の新聞は申合わせたように事件の殊勲者たる睦田老人の事ばかりを主として、堂々たる写真入りで掲載していたので、両方の新聞を読んだ人は思わず微笑させられたのであった。

警視庁に呼出された睦田元巡査は、総監以下、各係長、新聞社員等の立会の上で、倉川男爵の手から三千円の懸賞金を授けられたが、七ツ下りの紋もんつきはかま付袴かまを着けた彼は殆んど歩く力もないくらい青ざめていた。

それでも辛かろうじて床の上を前の方によるめき出ながら、男爵の感謝の言葉を受けるには受けたが、同時に自分の失態の代償とし

て、大枚のお金を受取る心苦しさを云おうとして云い得なかつた彼は、顔の筋肉をヒクヒクと引釣ひきつらせながら、涙をダラダラと流して男爵の顔を見上げた。そうしてトウトウお札の言葉さえ云い得ないまま、唇を二三度震わしただけで、覚おぼつか束ない廻れ右をして引退ひきさがろうとすると、その時に立会っていた総監が、自分の手で渡すべく準備していた金一封を取上げて、

「まだありますぞ……」

と呼び止めた。

その声と同時に睦田老人は、ストンと尻餅を突いて気絶してしまつた。







# 青空文庫情報

底本：「夢野久作全集10」ちくま文庫、筑摩書房

1992（平成4）年10月22日第1刷発行

入力：柴田卓治

校正：土屋隆

2008年10月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 老巡查

夢野久作

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>